# CAP2018　福岡の熱き日々

寺薗淳也（会津大学）

## 1. CAP2018 への道

CAP2018（世界天文コミュニケーション会議）…天文コミュニケーションに関わる人々のための学会。なんて魅力的なんだろう。

私自身は天文というよりは宇宙開発・宇宙科学のアウトリーチをメインフィールドとしている人間だが、そういった人間にとってもこの会議の題名はものすごく魅力的に響く。

実は、CAP への参加は前々から薦められていたのである。本特集原稿も主導し、CAP2018 でもスタッフとして活躍してくださった矢治健太郎さんから、「寺薗こそ行くべきだ」と非常に力強い応援をもらっていたのだ。そのため、2016 年のコロンビア・メデジンでの CAP にも参加を試みたのだが、残念ながら旅費を工面することができず、涙をのんで参加を見送ったのだ。

その後、「2 年後の 2018 年、日本で会議が開催される予定」という話が入り、こうなったらこれはなんとしてでも参加しなければならないと決意を固めていた。

私が住む会津若松から福岡までの旅費、期間中の滞在費、その他諸々の旅費の工面のため研究費を節約するなどし、また年度末という関係もあって事務局などとも折衝を重ねて、三月下旬、ようやく福岡行きの飛行機の機上の人となることができた。

## 2. 福岡の 5 日間、その初日

以上のようなわけであるから、CAP2018 にははじめて参加することになる。また、皆様は意外に思われるかもしれないが、天文関係の学会に参加するというのも実ははじめてなのである。一体どのような会議になるのか、どのような人が集まってくるのか、海外からの人たちはどのくらいの比率になるのか…いろいろな心配を胸にしつつ、会場となる福岡市科学館へと向かった。

エレベーターで 6 階へ上り、受付を済ませて会場のサイエンスホールへ。入った途端、ものすごい数の人たちが開会を待っている。

いろいろな国からやってきたことがひと目で分かる。日本人ももちろん多い。そして知り合いも多い。彼らとあいさつを交わしながら、少しホッとして席に着く…というか、席を探すのが大変なくらいの人だった。

そして、いよいよスタート。300 席のサイエンスホールはほぼ満席といってよい状況で（あとで立ち見の人までいらしたことに気がついた）、開催のときからもう熱気がすごい。私もこういう国際学会ははじめてだ。

熱気とともに学会は幕を開けた。基調講演が進むに連れてその盛り上がりが高まっていく様子が感じられた。いや、一体感というべきか。世界各地から集まっているはずなのに、開始 1 日目にして早速、みんなが一つのチームになったかのようだった。

## 3. あっという間に打ち解ける仲間たち

私は実は、CAP2018 に参加する際にもうひとつの心配をしていた。

私自身は天文というよりはむしろ惑星探査、さらにいえば惑星科学のコミュニティに属する人である。そういった人が、天文を主体とする CAP2018 の参加者にすんなり受け入れられるだろうか？

結論からいえばパーフェクトな杞憂だった。会場の席を譲ってもらうようなちょっとしたコミュニケーションから、自分の発表に対するリアクションまで、みんな本当に熱心で、

また他の人の内容を真摯に聞いて消化しようとしていた。質問も多かったし、会場では気軽に「どんなことやっているの？」といったような質問が挨拶代わりに交わされる、そんな感じだった。

そして、毎朝のセッション開始前には「エナジャイザー」(energizer) と称する元気づけの時間帯が設けられ、毎日違うちょっとしたゲームのような時間を通じて、その日一日の元気をつけるとともに、参加者同士が互いに会話を交わし、より仲良くなれるようなシチューエーションを作り出してくれていた。

他の学会にはみられないこのような試みは、さすがコミュニケーションを専門とする皆さんの腕前だと思うが、本当にさすがだ、と思わされた次第である。

## 4. イベント！セッション！イベント！

学会というのはただまじめに会場でセッションを聞いているだけではなく、みんなと一緒に楽しむ時間が必要である。

CAP2018 では、1 日目終了後に大濠公園（能楽堂）での能の講演、そして能楽堂前での一般向け野外観望会があった。また、3 日目にはバンケットがあり、こちらも多くの人で賑わった。

能はなんと、国立天文台広報普及室長の山岡さんが舞台に上がるという驚きの展開で、会場も驚いた人が多かったみたいだった。いつもとは違うコスプレ（？）の山岡さんは特に外国からの参加者に大人気だった。

また、市民観望会は市民の皆さんにもものすごく人気で、打ち切りの時間になっても大勢の人たちが望遠鏡の前に並んでいた。学会としての市民アウトリーチとしてこれ以上効果的なものはなかっただろう。

そしてバンケットでは、「あの」ブラック星博士が登場。私はもっぱら日本人の反応を追いかけていたが、海外の方にも「あれが日本の天文コミュニケーションの最終兵器だ！」ということがわかっていただけたのではないだろうか。

## 5. 次も乗り込むぞ！

学会は継続して参加することに意義があると思っている。その学会に次も参加する、そのためには私も研究や活動を頑張る、そうやって研究成果が生まれていくのだろう。

CAP2018 では、まったくはじめて、かつ専門外の私でさえ、まるで何回も来ているかのような親しみと温かさ、さらに言えば既視感を感じた。多分、私の肌、私の性格(もちろん私の研究)にも合っているのだろう。

そして今回参加できなかった方にも、そういう「肌の合う」方は大勢いらっしゃるのではないかと私は思っている。

旅費などの都合もあるかもしれないが、その投資の価値は必ずあると思う。私も次の CAP になんとかして参加すべく、日々の活動と研究を推進していきたいと思う。その決心のまぶたには、福岡で会ったみんなの顔が焼き付いている。

寺薗 淳也